たまシネマ通信　2017年8月26日発行

TAMA CINEMA 通信

TAMA CINEMA FORUM
TAMA映画フォーラム実行委員会　〒206－0025 多摩市永山1－5　ベルブ永山（永山公民館内）
代表：042－337－6661　直通：080－5450－7204　http://www.tamaeiga.org/

特別上映会 8/26㊏ ベルブホール（ベルブ永山 5F　京王永山駅・小田急永山駅下車徒歩約 2 分）

わすれな草

© Lichtblick Media GmbH

ゲストトークあり

第 3 回上映後、本作の字幕を手掛けたドイツ映画研究者・渋谷哲也氏（ドイツ映画研究者 / 東京国際大学教授）をお招きしてトークイベントを開催いたします。

上映スケジュール

10:30 — 11:58　第 1 回上映
13:00 — 14:28　第 2 回上映
16:00 — 17:28　第 3 回上映
17:28 — 18:10　トーク
　ゲスト：渋谷哲也氏
18:30 — 19:58　第 4 回上映

＊全席自由席・各回入替制
＊開場は各回 15 分前
＊上映時間は変更になる場合があります。
＊ゲストトークはチケット（半券含む）提示で入場できます。

チケット料金

前売	大人（中学生以上）	1,000円
当日	大人（中学生以上）	1,200円
	子ども（4歳～小学生）	600円

＊ TAMA 映画フォーラム支援会員、障がい者とその付添者 1 名は当日 600 円です

企画者からのメッセージ

認知症の母の世話をする父を手伝うために実家に戻った息子が家族を記録したドキュメンタリーである本作は、プライヴェートを映した内的なフィルムであると同時に社会的な外への広がりを持ったフィルムでもある。それは形式と内容、どちらの側面からも言える。

まずは形式から。同様に自身の家族を捉えた日本のドキュメンタリーでよくあるのは、手持ちカメラで監督の息づかいを感じさせるような主観的な記録であろう。しかし本作は対照的にしっかりとした固定画面が多く第三者的な視点で描かれている。それもそのはず、監督は既に映画監督であり本作はスタッフクルーを引き連れて撮った作品なのだから。

次に内容。こちらも自らの家族を捉えた作品の典型として、例えば家族への愛情や憎しみを交えながら自らのアイデンティティを追うような作品が挙げられるだろうが、本作は違う。私的なことを描きつつもそこから一歩引いて社会・歴史的な視点を織り込んで俯瞰的に描いている。両親の生きた個人の歴史が、広い社会の歴史へと接続される。60 年代の政治闘争で活躍した母の歴史を辿れば、それはそのまま現代のドイツへの歴史へと繋がってゆく。熱い政治の時代を生きた母と父。そこでの出会いがあって監督である息子が生まれ、ひいてはこの作品が生まれたともいえる。

記憶を失いゆく母を中心に監督が家族と共に過ごす最期の時間の記録は、観客それぞれの家族像と結ばれながら、静かに観客の胸を打つことだろう。「私を忘れないで」（※）。本作は、忘れられてしまう私たちと忘れてしまう私たちに、そっと優しく手を差し伸べる。道端に咲く小さな花を慈しむように。※本作の原題「VERGISS MEIN NICHT（独）/ FORGET ME NOT（英）」の直訳

（佐藤友則）

『わすれな草』とあわせて観たいおすすめ映画７選

『息の跡』（監督：小森はるか／ 2016 年／ 93 分）

本作は、岩手県陸前高田市で種苗店を営みながら、東日本大震災の記録を後世の人に残そうと手記を書く佐藤貞一さんを追ったドキュメンタリー作品である。失われゆくまちの記憶を文章で記録して残そうとする佐藤さんの振る舞いを、小森監督は長い時間をかけて記録した。

『わすれな草』の原題「VERGISS MEIN NICHT」※は、直訳すると「私を忘れないで」という意味である。この「私」とは果たして誰なのか。それは、記憶を失う認知症の母に対する周囲の人々のことであると同時に、少しずつ死に近づく母自身のことでもある。彼女の生きてきた軌跡を、監督は、昔のアルバムやニュース映像、密かに綴られた手紙を通じて探り、映画として残した。母の世話をしながら監督と家族が過ごす時間もまた「失われゆく」時間のかけがえのない思い出として映画の中に刻み込まれている。

※英題は「FORGET ME NOT」。ドイツ語題・英語題ともに「わすれな草」の意味もある。（T.S）

『永い言い訳』（監督:西川美和／ 2016 年／ 124 分）

妻を亡くした有名作家の主人公（本木雅弘）が同じ事故で妻を亡くした妻の親友の遺族（竹原ピストル）と出会い、やがてその子供たちの面倒を見るようになる。そこには自分が作ることの出来なかった家族の形があり、その家族と関わり合ううちに主人公の心の中で何かが大きく変わっていく。

心を寄せ合う家族を描いた『わすれな草』とは真逆の夫婦生活を送っていた主人公が、妻の親友の家族を支え、寄り添っていくうちに他人だった家族とやがて本物の家族のようになっていく。

時に家族の形は危うい。だからこそ『わすれな草』の確かな家族がとても尊いのである。家族について考えさせられる２作品である。（H.T）

『幸せなひとりぼっち』（監督：ハンネス・ホルム／スウェーデン／ 2015 年／ 116 分）

愛する妻を亡くした孤独な中年男オーヴェと、向かいに引っ越してきたパルヴァネ一家の交流を描く。要所要所に挟まれるオーヴェと妻ソーニャの回想が、物語を鮮やかに彩っていく。

頑固で怒りっぽく偏屈で、だけれどその実、真面目で純粋であたたかいオーヴェ。その不器用な姿に、ご家族を、あるいは自分自身を重ねる人もいるかもしれない。誰かと共に生きること、他人の領域に踏み込むこと、受け入れること。どれもが人生において必要であると教えてくれる。

余談だが、この映画のキスシーンは『ライフ・イズ・ビューティフル』にも引けをとらないほど素敵。（R.S）

『八重子のハミング』（監督：佐々部清／ 2016 年／ 112 分）

陽信孝氏の原作を『ツレがうつになりまして。』（2011 年）などで知られる佐々部清監督が映像化した。山口県萩市を舞台に誠吾（升 毅）の 12 年にも渡る介護と夫婦愛を描ききった。

誠吾は友人の医師から妻の八重子（高橋洋子）が若年性アルツハイマー病であると告げられる。施設を利用することなく介護のほとんどを家族で担っていく。衝突する日々があり、地域住民に叱咤されることもある。けれども、支えてくれる多くの人もいる、その温かさが救いである。

症状が進むにつれて少女のように八重子は可愛らしくなっていく。そんな八重子と誠吾のやり取りは時にユーモラスだ。家族による介護、これが最も良いとは限らないだろう。しかし、八重子に寄り添っていく姿勢に学ぶことは大きい。（H.Y）

『わすれな草』に関連したテーマや世界観などをキーワードに実行委員が選んだおすすめ映画を紹介いたします。

『愛、アムール』（監督：ミヒャエル・ハネケ／フランス・ドイツ・オーストリア／2012 年／127 分）

ジャン＝ルイ・トランティニャン（『アスファルト』のイザベル・ユペールと絡んだ少年のおじいちゃん）、エマニュエル・リヴァ、イザベル・ユペールらが出演。長年連れ添った夫婦が妻の認知症発症に伴い、夫は必死に妻に寄り添っていく。試練の連続が押し寄せる。そして最後に選んだ選択が……。究極の愛とは何かを深く考えさせられる。

今回、『わすれな草』を観た時に真っ先に頭に浮かんだ作品が『愛、アムール』でした。両作品とも夫は冷静な目を持って妻に接している。愛が媒介する 2 人の世界は同じ幻想を共有している。しかし、『わすれな草』がドキュメンタリーとは言え、この温度差は何なのだろう。

どちらの作品も見応えがあり、観る側に一筋縄ではいかない感想を抱かせる、手ごわい作品である。さて、あなたはどちらの夫婦に思いを入れるか。ぜひ観くらべてください。（N.T）

『人生フルーツ』（監督：伏原健之／2016 年／91 分）

「コツコツ、ゆっくり」…… 樹木希林さんのナレーションで始まる。雑木林に囲まれた 1 軒の平屋に住むのは、建築家の津端修一・英子夫妻。四季折々、庭を彩る 70 種の野菜と 40 種の果実が英子さんの手でごちそうに変わる。長年連れ添った夫婦の歴史と暮らしを丹念に描き出す。

有機的な集合住宅を提唱してきた修一さん。精神病院の設計が最後の仕事となる。コンクリートの建物に、こんな場所で暮らすわけにはいかないと病院の方が修一さんにお願いしたのだ。自然と寄り添うのは日本風だろうか。『わすれな草』は人間と共にあり西洋風だ。しかしこの言葉は重なる。「家は、暮らしの宝石箱でなければならない」「長く生きるほど、人生はより美しくなる」（A.O）

『パーソナル・ソング』（監督：マイケル・ロサト＝ペネット／アメリカ／2014 年／78 分）

元 IT 業界人のソーシャルワーカー、ダン・コーエンは、認知症患者が自分の好きな歌（パーソナル・ソング）を聴くことによって、音楽の記憶とともに何かを思い出すのではないかと思いつく。

娘の名前すら思い出せず、ふさぎこんでばかりの 94 歳のヘンリーに iPod で彼の好きだった音楽を聴かせると、目を見開き陽気に歌いはじめ、自身のことも饒舌に語り始めた。ミュージック＆メモリーと名付けられたこの療法を試した他の患者たちも、同様に眠っていた記憶・感情が奇跡のように覚醒する様子をカメラは映しだしていく。

原題「Alive Inside」は意訳するなら「心は生きている」だろうか。新たな治療法としての音楽の持つ可能性を示したドキュメンタリー作品であり、患者やその家族たちの喜びにあふれた姿には感動を覚える。（F.I）

消えゆく母の記憶にある波乱の過去を辿りながら

僕はこの作品を撮りあげた

父は観終わった後に言った「人生は素晴らしいな」

『わすれな草』ダーヴィット・ジーヴェキング監督

© Lichtblick Media GmbH

特別上映会レポート

7/22㈯　ベルブホール

ユーリー・ノルシュテイン監督特集上映

「アニメーションの神様、その美しき世界」

7月22日の特別上映会ではユーリー・ノルシュテイン監督特集上映「アニメーションの神様、その美しき世界」と題しまして、監督の代表作6作品を上映しました。とても暑い日ではありましたが、小さなお子さまから幅広い世代まで、たくさんの方にご鑑賞いただきました。ありがとうございました。

トークゲストとして、ニューディアー代表の土居伸彰氏とアニメーション作家のひらのりょう氏がお越しくださいました。実際に監督にお会いしているからこそ知っている裏話から、アニメーション作家の目線で見るノルシュテインの作品、使われている技法についてなど、それぞれのお立場からお話しいただきました。特に「気になる」との声が多かった『話の話』のさまざまな解釈は、トークを聞いた後、すぐにもう一度観たくなるような興味深いお話でした。（都築彩花）

土居伸彰氏（左）とひらのりょう氏

お知らせコーナー

第27回映画祭TAMA CINEMA FORUM
2017.11.18㈯～11.26㈰ 開催予定！

現在は映画祭でどんな企画をしようかと案を練っている段階です。そして第9回目を迎える日本で一番早い映画賞「TAMA映画賞」はどんな作品・受賞者に贈られるのか。皆さん、どうぞお楽しみに！

たまシネマ隊募集！

2017年11月18日～11月26日に開催予定の第27回映画祭TAMA CINEMA FORUMを映画祭直前から終了まで、映画祭のPR活動や運営を支えていただく短期運営ボランティア・スタッフ「たまシネマ隊」を募集します！

第1回たまシネマ隊募集説明会
日時：2017年9月18日（月・祝）15:30～17:00
（受付は15:15より）
会場：多摩市立永山公民館・講座室（ベルブ永山3F）

第2回たまシネマ隊募集説明会
日時：2017年10月1日（日）15:30～17:00
（受付は15:15より）
会場：多摩市立永山公民館・講座室（ベルブ永山3F）

たまシネマ隊の詳細および募集説明会への参加申込みはhttp://www.tamaeiga.org/cinematai/をご確認ください。映画祭を一緒に盛り上げていただける皆様のご参加をお待ちしております。

支援会員制度のお願い

当映画祭を一緒に支えて頂ける支援会員を募集しています。映画を「観る人、観せる人、創る人」の交流の場づくりを通じた、地域と日本映画界の活性化に向けて、資金面でサポート頂けませんか。

ご支援頂いた方には特典をご用意していますので、ぜひご協力をお願いいたします。

［支援金寄付　個人会員］一口1000円から

郵便振替番号　00160－5－541123
加入者名　TAMA映画フォーラム実行委員会
（ご不明な点はお問い合わせください）

特典①：映画祭チラシ送付
特典②：映画祭パンフレット贈呈
特典③：映画祭TAMA CINEMA FORUMの当日チケットを前売価格で。
特典④：特別上映会割引
（当日チケットを、支援会員特別価格に。上映会は2～8月の間に4～5回開催予定）

その他特典もご用意する予定です。

※支援会員のお申込みがホームページからもできるようになりました！ぜひご活用ください。
http://www.tamaeiga.org/support/

TAMA映画フォーラム実行委員会ホームページ　**www.tamaeiga.org**
@tamaeiga（最新情報をフォロー）　**www.facebook.com/tamaeiga**（facebookページに「いいね！」で参加）

たまシネマ通信　Sep. 2017　Issued by *TAMA CINEMA FORUM*
Editor in Chief　*T. Sato*　Editorial Design　*F. I*　Contributing Editors　*TAMA CINEMA FORUM Staff*
禁無断転載